

フィールドワーク便り

イサーンに残るよろずの森

小野寺 佑 紀*

イサーンことタイ東北部の森を調査していると言うと、まだ森があるの？と驚かれることがしばしばある。国立公園ではない片田舎が調査地です、というとさらに不審がられてしまう。私はそんなイサーンで森の調査をしている。

首都バンコクから高速バスで4時間ほど走ると、イサーンの入口であるナコンラーチャーシーマー県に着く。私のフィールドは、そこからさらに3時間のところにあるヤソートーン県である。国道21号線を車で走っていると、はるかに広がる水田の中に、小さな森がぽつりぽつりと点在している。衛星画像で見ると、それら大小の森がパッチ状に散らばっているのがわかる。この森は、なぜここに残っているのだろうか？世界中で多くの森林が失われる一方で、残される森林とはどのようなものなのだろうか？そんなことが知りたくて、私はヤソートーン県にあるK郡でフィールドワークをしている。

調査内容は各森林の毎木調査と聞き取り調査で、調査にはムックさんとグンさんという2人の男性に同行してもらい手伝ってもらっている。ムックさんは森林調査の経験が

あって、頼りになる2児の父である。一方のグンさんはお調子者で木登り上手の独り者。森の中でも、村へ戻ってもよく喋る仲の良い2人である（写真1）。

K郡には112の村落があり、13の行政区にまとめられている（2001年現在）。郡の統計データに記録されている共有地のうち、林地は約100カ所あり、これらが私の目指す森だ。3人で毎日のように森へ入っては、プロットを張り、樹種を記録し、その場で分からなければ樹木の一部をサンプルとして採取する。プロット1つは10m四方で、プロット数は森の大きさによって変える。私が



写真1 森の看板の前で

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

GPS を手に、どこにプロットをとるか指示をすると、2人がビニル紐でプロットを張ってくれる。次に、ムックさんが樹幹にナンバテープを付けていき、その番号順に私が樹種を同定し、グンさんが記録をする。切り取ったサンプルはビニル袋に入れて、村へ持ち帰る（写真2）。

お昼ごはんは各村々にある食堂で食べるので、その時に村の方々に樹種名を尋ねるようにしていた。調査の日は早朝に市場へ行って、タケで編んだかごにもち米を5 パーツ分入れてもらう。村の食堂で注文したソムタム（青いパイヤのサラダ）とガオラオ（臍物のスープ）、そしてもち米が毎日の献立だ。もち米を手で適量つかみとって柔らかくし、ソムタムをつけて食べる。このお昼時が村の人と一番コミュニケーションを取れる時間で、どの村へ行っても2人はとても気さくに村人に話しかけ、樹種名やその利用方法を聞きだしてくれる（写真3）。

聞き取り調査は、村長を対象に行う。質問は、村にある森の数とその名前、利用方法、

管理方法、そして簡単な歴史だ。時間があれば、お願いをして森へ連れて行ってもらう。イサーンでは、普段はタイ語よりもイサーン語（ラオス語の方言にあたる）を話す。私のタイ語をムックさんがイサーン語に訳し、村長の答えはグンさんが野帳に記録する、という役割分担をしていた。村を訪問するときに、2人が村人とよく話すのは、選挙のこと、政治のこと、そしてヤソートーン名物のロケット祭り (*bun bang fai*) だ。毎年5月から6月にかけて各村ではロケット花火を打ち上げ、踊り、歌って雨乞いをする。

ロケット祭りが盛んな時期の調査中に、私達はヘットコーンと呼ばれるキノコ (*Termitomyces* spp. AMANITACEAE) を発見した。首都バンコクへ行くと、このキノコが入ったスープは1杯何百パーツもするが、バンコクで生活する多くのイサーン出身者はそれでも好んで食べているそうである。さきほどのソムタムが1皿10パーツであることを考えればいかに高価なものか分かるだろう。この日は「ユウキ、今日は調査よりもキノコ



写真2 プロットを張って毎木調査をする



写真3 牛の放牧にきていたおばあさんに話を聞くムックさんとグンさん

探しだ！」ということで、3人で必死になって探した。たくさんのキノコが採れる雨季には、森で驚くほど多くの人に出会う。とくに雨が降ったあとはキノコがいっせいで出てくるので、老若男女がおのおの手にかごを持って、お互いに位置を確認するために声を掛け合いながら歩く。「ミーヘットボー？(キノコとれた?)」は森の中での挨拶だ。こう尋ねると、嬉しそうにかごの中身を見せてくれる。イサーンの人々にとって、キノコは食卓に欠かせない食材であると同時に大事な収入源である(写真4)。

ではこのキノコたち、どういうところでよく採れるのだろうか？私たちが見つけたのは、ある村のはずれにある小さな森だった。そこは、村からかなり距離があるためにほったらかしになっている森だ。村の人に尋ねると、郡でキノコが一番よく採れるのはマップリックの森(*dong maprik*)だと答えてくれる。マップリックの森は、この辺りで一番大きな面積を誇る森で、今は保全林になっている。農地として使われないまま残されているうち



写真4 森で採れたキノコ

に森林そのものの価値が重要視され、村や行政区をあげて決まりを作って管理を行うまでになっているのだ。遠くからも車でやってきて、たくさんの人がキノコを採取していく。ヘットコーンとは一般的にはヘットプルアク(プルアクとはシロアリのこと)と呼ばれており、マップリックの森のように暗くてうっそうとした森はいかにもたくさんキノコが採れそうなのである。

調べていくうちに、残された森というのは実にさまざまであることが分かってきた。村の近くには、ドンプーター(*dong pu ta*)と呼ばれる、村の精霊をまつる森がある。これは、邪悪なものから村を守るために村を建設するときを作るもので、なかには小さな祠があり、年に数回先祖をもてなす儀礼を行う。こういった森は、長期にわたって攪乱されていないために、ヤーン(*Dipterocarpus alatus*)やバーク(*Anisoptera costata*)といった幹の直径が1mにもなるような大きな木が見られる。他の森では伐採されてしまったブラドゥー(*Pterocarpus macrocarpus*)やタベーク(*Lagerstroemia* sp.)といった有用材もドンプーターでは大きなサイズの個体が見られる。遠くからもよく見えるので、この森を目指して行けば村へたどり着けることがある。また、村の西には墓場の森であるパーチャー(*pa cha*)がある。かつてはここに遺体を埋めていたが、最近はお寺で埋葬することが多くなり使われないまま放棄されている。村人は気味悪がってほとんど利用しないので、ここは樹木の密度が高く、容易には入れない。

それ以外の森は日本で言う里山のような役

割を担っている。その多くではかつて焼畑を行っていた。第二次世界大戦以前は自家用の野菜や米を栽培していたが、大戦以降は年代によって、ワタ、ウリ、ケナフ、キャッサバと栽培作物が移り変わる。現在は焼畑耕作を行わなくなっているが、日常的にキノコやタケノコ、薬草、食用の葉や花、昆虫、果物、薪炭材などを採取する場となっている。このような森では、萌芽更新を行っているブナ科樹種 (*Lithocarpus* sp.) の現存量が多くなっていた。

もう少し複雑な歴史を持つ森もある。プライト村の森はもともと墓場の森として利用されていたが、いつからか寺での火葬が主流となり、この森では焼畑が行われるようになった。ところがある時から僧侶が森の保全に取り組みはじめた。タイで信仰されている上座部仏教タムユット派は、林の中での瞑想を大切な要素としていることから [プラチャイヨー 1997]、僧侶が森の保全に取り組むことは少なくない。これ以降村人は伐採をやめて野火の管理を行い、現在では国から表彰されるほど立派な森となっている。その他にも、自然教室となっているかつてのドンプーターや、寺に寄付された里山、今は里山として利用されている村落跡地などひとつひとつの森には異なる履歴があることがわかる (写真 5)。

現時点で確認される樹木の密度や種組成といった特徴は、その森の利用の履歴を反映していると考えている。今ある景観は人々の資源利用の方法が変化していくなかで、土壌条件や民俗、歴史の影響を受けてその時々で姿



写真 5 自然教室にある森の案内図

を変えながら保たれているようだ。

ところで、グンさんは調査を通じて薬草採りに目覚めた。名前の分からない植物があると、村へ戻って植物をよく知っているモーター (村の医者) に尋ねるうちに仲良くなり、自分でも採りはじめたのだ。今も修行を続けているのだろうか。よろずの森がこれからもイサーンの人々とともにあり続けてくれることを願わずにはいられない。

引用文献

プラチャイヨー, プアレート. 1997. 「ワット・パー, 森の寺」 京都大学東南アジア研究センター編『事典東南アジア』 古川久雄訳, 弘文堂, 404-405.

スマトラ沖地震津波と社会変化： タイ南部における一漁村の現在，未来

小 河 久 志*

「逃げて！ 早く海から出て！！」

2004年も残りわずかとなった12月26日の昼前。普段物静かな滞在先の奥さんが、大声で叫びながら血相を変えてこちらに走ってくる。この時私は、浜辺で船の手入れに取り組む旦那さんの傍らで、彼らの一人息子と水遊びをしている真っ最中。何が起こったのか、これから何が起きるのか、皆目、見当もつかず、不審に思いながらも、とにかく言われるままに海を出る。家に着くと、濡れた体を拭く間もなく、家に錠がかけられる。何が起きたのか、せわしなく動き回る村民に尋ねても「早く逃げろ」の一点張り。こうなるとさすがに、「何か大変なことが起きるのでは」と感じはじめ、バイクのエンジンをかける。すると、そんな私を目敏く見つけた隣家のおじさんと子供2人が走り寄って来て、「山の方まで連れていけ！」と命令口調で「懇願」してくる。それから数十分後、4人乗りのバイクを飛ばしに飛ばした私たちは、村から20キロほど離れた山あいにある知人宅に到着することになる。この家には、私がお世話になっていた家族をはじめとする数世帯がすでに到着していた。パニック状態からは何

とか脱したものの未だ落ち着きを取り戻せていない彼らとの会話、TVニュースから、朝に身体に感じる程度の地震があったこと（私はその時間、熟睡していたため気付かなかった）、それに伴い津波が起きたことをようやく知った。また、津波警報システムが存在しないなか、プーケットに住む知人が奥さんにかけて津波襲来を知らせる1本の電話が、今回の避難を可能にしたという「事実」も。

当時私は、2004年3月から2年間の予定でタイ国南部トラン県の漁村M村に滞在している最中であつた。タイ南部地域に居住するムスリムが見せる宗教実践の姿を、国際的イスラーム復興団体タブリーグや精霊信仰などとの関係から調査するためである。日本でも体験したことのない津波を、数百年以上もの長きにわたり津波の起きていないタイ、津波を意味する単語すら存在しないタイ¹⁾で、しかもフィールドワーク中に遭遇するとは、今思うと誠に失礼な話だが、その時の私は、津波にあつたということに興奮しきっていた。少なくともこの時点ではまだ事の重大性に気付いていなかったのである。

* 総合研究大学院大学文化科学研究科

1) 津波襲来後、各マスコミは、津波を意味する単語として「大波」(*khun yak*)や「津波」(*tsunami*)を用いた。

津波被害：その社会経済的影響

津波襲来後、私を含む多くの村民は津波再来への恐怖から、数日間、村には戻らなかった。ある者は親戚・知人の家や隣村のモスク、またある者は町のホテルで、短期の避難生活を強いられることになった。この間、皆一様に、TV から流れる津波報道にその被害の大きさ、恐ろしさ、自分たちが生きている奇跡を知らされ、また同時に親戚や知人からの安否確認の電話対応に追われた。²⁾ そして心落ち着く間もなく、帰村という形で以前とは異なる現実には否応無く直面することになる。

村に戻って最初に感じたことは、思った以上に物的被害が「小さい」ということだ。村内をさっと見渡す限り、浸水した海沿いの家屋数件を除けば、大半の家屋は以前と変わらぬまま佇んでいた。TV でプーケットやクラブシーといった被害の大きい場所の映像を散々見せられてきた身としては、村が壊滅的な被害を受けているものだと思い込んでいたのである（写真1）。帰村当初、このイメージは、多かれ少なかれ村民の多くから聞かれるものであった。

しかし、船の停泊地である運河付近に目を移すと、このイメージが「間違い」であったことに気付かされた。私の滞在する M 村は、全世帯の約 90%が何がしかの形で漁業に従事している「漁村」であり、その大半が沿岸域で小規模な漁業を行っている「零細漁民」

である。彼らの使用する漁船の多くは、ルア・ハンヤオ (*rua hang yao*) と呼ばれる船外機エンジン付きの木造小型船だ。他の中・大型漁船に比べその重量は軽く、また木造であるために日本の小型船ほどの強度はない。津波に飲み込まれれば、ひとたまりもないであろうことは容易に察しがつく代物だ。運河を一見する限り、ある船は真っ二つに裂け、またある船は沈没し舳先のみを水面に出しているなど、大半の船が何らかの損傷を受け無残な姿を晒していた（写真2）。そして運河のいたるところに、破壊したハタ養殖ケージの



写真 1 甚大な津波被害を受けたバンガー県ナムケム村では、大型船が内陸まで押し流された。

2) ちなみに現首相の親族が経営する携帯電話会社は、津波襲来から 1 週間ほどの間、津波被災地である南部 6 県からの国内通話料金を無料にした。



写真2 津波で壊れた漁船



写真3 津波により倒壊した家屋

一部や魚網が漂っている。運河沿いに建つ杭上家屋も、波や船との衝突により、柱が折れ傾くものが相当数見られた（写真3）。

M村の漁業従事者の多くはまた、漁具やガソリンといった漁業に必要な物品を「頭家」(*thaokae*) と呼ばれる小規模卸売商から譲り受けるかわりに、彼らに独占的に水揚げのすべてを市価より安値で売却するというパトロンクライアント関係を結んでいる。同時に、彼らはこの関係において、漁獲の多寡に応じて毎月、頭家に上記漁具代をはじめとする借金を返済しなければならない。こうしたプロセスを経て得られる彼らの月平均収入は、およそ4,000バーツ（2005年5月末時点で1バーツ約2.7円）。この額を2004年度の国民平均月収14,617バーツ [National Statistical Office 2004] と比べれば、彼らが経済的余剰のほとんどない「その日暮らし」を強いられていることが判るだろう。しかしエンジンを含む船体価格は、大きさや新品・中古の別にもよるが40,000から60,000バーツほどであり、彼らの平均月収の10か

ら15倍にあたるいわば「高級財」だ。運良く修理だけで済むにしても、木材、塗料、板と板の隙間を埋める樹脂、人件費といったコストがかさむ。また、網などの漁具も一度にすべてを購入するとなると、とてもではないがその費用を自力で賄うことはできない。こうなるといつものように頭家に頼るしかないのだが、今回ばかりは事情が異なっていた。頭家もまた、他の村民同様、津波の被害者であったのだ。

事情はこうだ。津波襲来後、アンダマン海沿岸で採れる魚介類を「死体を食べた魚」として忌避する傾向から魚価が大幅に下落した。さらにガソリン価格の高騰、漁獲高の減少が小規模卸売商たる頭家の経済活動を逼迫したのである。こうなると頼みの綱である頭家に漁業再開資金を捻出してもらおうことも不可能になってしまう。もはや漁業再開の可否は、政府や海外援助機関といった外部からの支援の有無にかかってくる。しかし村で話を聞くと、これまでごくわずかな量の米や飲料水、即席麺といった食料が各世帯に配給され

ることはあっても、後述する理由から復興支援金のような金銭的援助は未だ全被災世帯にまでなされていない。このため男女を問わず村民の多くが職を求めて村を出るようになった。とりわけ成年男性の多くが、隣のサトゥン県まで出てマレーシア沖で操業する遠洋漁船の乗組員となっている。家族と離れて暮らさなければならず、また給料は村で得られる額よりも低めだが、それでもいち早く以前の暮らしに戻るためには仕方の無いことだ、と彼らは言う。

津波の影響はまた、経済的なものだけに留まらない。たとえば、2005年3月12日に新たな津波が再来する、という噂が村内に広まったことがあった。噂の出所は、近くの町に住む古い師の予言なのだが、それを信じて村から一時避難する世帯も現れた。避難をしなかった村民も、恐怖心に勝てなかったのか、指定日の夜になると数十名にのぼる成年男性が徹夜で海の見張りを行った。結局は何も起きなかったが、また津波襲来を境に、とくに老年たちにいえることだが、いつ津波が来ても逃げられるよう身の回りの品をカバンに詰めて就寝時に枕元に置く者が現れた。挙句の果てには、「沖合に巨大な鬼(yak)が出て、それを見た漁民が失神した」など多くの幽霊譚が誕生し、それを恐れて海に出ない村民まで出る始末。津波襲来は、村の経済生活のみならず社会生活にまで深い影を落としているのである。

津波災害からの復興に向けて：課題と今後の展望

このように今回の津波襲来は、M村社会のさまざまな側面に傷跡を残すことになった。そして現在、M村は災害からの復興に向けて少しずつ歩みは始めている。

だが復興への動きは、必ずしも順調に進んでいるとは言えない。たとえば先に触れた政府からの復興支援金について筆者が調べたところ、実際にはM村へ相当額の支援金が支給されていたことがわかった。しかしながら、支援金の受取人兼分配人たる村長が不正を働き、それを自身の親戚23世帯にのみ分け与えただけで、残りすべてを着服していたのである。つまり、この23世帯から外れる150世帯以上の村民は、国からの支援金を受けることができなかったことになる。村長の不正に対して当然、受給できなかった村民は郡役場、県庁に抗議に行ったが、村長と懇ろな関係にある高位の職員がこれを受け付けなかった。タイ政治の特徴を描く際によく指摘される二者関係に基づく癒着の構造が、皮肉なことに未曾有の大災害に見舞われた際にも顕在化したのである。

また政府による津波被災地支援の地域格差が、M村の復興にマイナスに働いた。これは新聞やTVなどのマスコミがすでに指摘していることだが、政府は、海外諸国に対して被災地復興を手っ取り早くアピールするために、M村のような漁村を無視して外国人の多く集まるプーケットなど観光地の復興に力を注いだ。今回津波の被害にあった南タイ西海岸6県沿岸域は、その多くが観光とは無縁

の漁村である。つまり政府が重点的に支援を行った観光地は、国内全被災地の中の一握りにすぎず、そこから外れる「その他多く」の被災地が、国の対外アピールの犠牲になったのである。さらにこの動きに追討ちをかけようようにタイ政府は、緊急事態にもかかわらず、「外国からの支援に頼らない自立した国家」をアピールするべく日本をはじめとする海外諸国からの金銭的支援を断った。結果論だが、少なくともこれら海外からの金銭的支援を受けていれば、M村など被災地の復旧も今以上に迅速に進んでいたかもしれない。

しかし他方では、一向に進まない政府支援の間隙をぬってNGOが各地で支援活動を実施している。M村でも国際的ネットワークをもつNGOが、被災者、特に漁業関係者に魚網など漁具被害への金銭的支援を行おうとしている。彼らの活動は始まったばかりであり、いかなる成果を村民に与えるか今のところ明らかではないが、政府支援の空隙を埋める活動として期待される。

M村をはじめとする被災地一帯で信仰されるイスラームも津波襲来を契機に、いっそうの変容が起こることが考えられる。それにはまず、M村における成年男性人口の減少が大きく関係してくるであろう。イスラーム実践はそもそも、男性中心主義的指向の強いものである。とりわけイスラーム世界の「周辺」に位置するM村のような場所の場合、

イスラーム実践に熱心なムスリムの割合は、イスラーム教育の普及とともに年齢が下がるほど高まる傾向にある。このため、犠牲祭に代表される年中行事や毎週金曜日の昼に行われる集団礼拝などM村のイスラーム実践を見ると、成年男性を中心に営まれていることがわかる。また今日、タブリーグと呼ばれる国際的ネットワークをもつイスラーム布教団体³⁾が、タイ国内、とりわけM村を含む南部でイスラーム復興の動きを活発化させている。この運動の参加者は、10人前後の集団を組んで3日、40日、4ヵ月という予め決められた期間、国内外問わず村外各地へ布教の旅に出る一方で、他所から来村する布教団の世話を行っている。M村は、週に1度、村モスクで周辺各村から代表者を集めたタブリーグの地域会議が開催されるなど、周辺地域におけるタブリーグの中心と位置付けられているが、その活動の担い手もまた、成人男性層にあたる村民たちである。

さらには、上述の動きと並行する形で村民の間に高まりつつある精霊への関心も見逃すことができない。たとえば、これまであまり熱心に行われなくなっていた船霊(*mae ya nang*)に関わる儀礼が頻繁に開催されるようになったことは、それが顕在化した1つの表れといえるだろう。船霊は、すべての船の船首部に宿る女性の精霊で漁全般に関わる事柄を司るとされる。現在、津波により漁の安全

3) タブリーグは、1926年にイスラーム学者マウラーナー・ムハンマド・イリヤースにより北インドのメーワートで始められた「布教」を活動の中心概念に据えるイスラーム運動である。現在では、非常にシンプルな形でイスラームの基本を説く活動方針とその非政治性が一般のムスリムに受け入れられ、パキスタンのラーイウインドを本部にその活動範囲をタイを含む世界80カ国にまで広げている [Masud 2000]。

や大漁が困難になっている状況にあるからこそ、多くの船主が船霊に寄る辺を求めるのであろう。⁴⁾ 津波襲来前は、イスラーム復興の進展により精霊に対する信仰がイスラームの教えに反するというで忌避されていたにも関わらず、である。津波災害からの回復が進む今後、精霊信仰やタブリーグといった諸力が相互に関係をもちながら構築する当地のイスラーム実践から目が離せない。

以上、タイ南部に位置するムスリム漁村の津波襲来直後から現在に至る社会経済状況の概略を描いてきた。この文章を書くことで改めて痛感したことは、津波による被害の大き

さ、根深さと、そこからの復興の困難さである。時間の経過とともに目に見える形での復興が成し遂げられていく一方で、さまざまな変動もまた当該社会に生起するであろう。調査終了までの残り1年間、M村の中から復興の姿を見守っていきたいと思う。

引用文献

- Masud, M.K., ed. 2000. *Travellers in Faith: Studies of the Tablighi Jamaat as a Transnational Islamic Movement for Faith Renewal*. Leiden: Brill.
- National Statistical Office. 2004. *Statistical Yearbook Thailand 2004*. Bangkok: National Statistical Office.

インド、ダム水没地テーリーとガンディー主義者

石坂晋哉*

私のフィールドは、凄まじい場所である。破壊された家の残骸が並ぶ殺伐とした風景。昼夜を問わず走りまわるトラックの轟音が周囲の山々にこだまし、工事現場からはときどきダイナマイトの爆音とともに振動が伝わってくる。そして、淀んだ水がすでに町の大半を取り囲み、町全体を呑みこむ日をいまかいまかと待っている。私の調査地、北インド・ウッタラカンド地方（ヒマラヤ山岳

地帯）のテーリーは、ダム水没予定地である（写真1, 2, 3）。

テーリーは美しい町であったという。なるほど、町の高台にはゴシック様式の立派な時計台の残骸が残っている（写真4）。この時計台は、インド皇帝ヴィクトリア女王の在位60年を記念して時のテーリー藩王（マハーラージャ）キルティ・シャー（在位1892-1913）が1897年に建てたものであ

4) 船霊儀礼では、船霊の機嫌を取るべく、カレーやもち米といった供物の奉納や船体への香粉の塗布、色鮮やかな布を船首部に巻きつけるといったことがなされる。

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

る。また町を見下ろす丘の上にはマハーラー
ジヤの宮殿が聳えていたということだが、残
念ながらそれは現在、すでに跡形もない。

大河ガンガー（ガンジス）川の本流バー
ギーラティー川と支流ピランガナー川の合
流点にあるこのテーリーの町は、川の合流点
に聖性が宿るというインドの観念によって、
聖なる場所とされている。そのため、ヒン
ドゥー教の寺院をはじめとして、イスラーム
のモスク、シク教のグルドワラーなどの

宗教施設も集中していた。テーリーは、ガン
ガー源への巡礼中継地として、また周辺地域
の交易の中心地として、さらにヒマラヤへの
トレッキング路の中継地として、数年前まで
は大変な賑わいをみせていたようだ。

このテーリーの町が美しさと活気を失って



写真1 テーリーの町、家の残骸が並ぶ
(2003年2月28日筆者撮影)



写真2 テーリー・ダム建設のトラック
(2004年7月25日筆者撮影)



写真3 テーリー全景 (2004年9月21日筆者撮影)



写真4 時計台 (2003年2月28日筆者撮影)

いくことになった元凶は、テーリー・ダム建設計画である。世界第6位の堤高(260.5m)をもつ巨大なテーリー・ダム(写真5)は、デリーなど平野部の大都市に電力と飲料水を供給することを主な目的とし、さらに灌漑と洪水制御の機能をも併せもつ多目的ダムである。このダムの建設は、インドが誇る近代的なプロジェクトであるが、一方で地元社会は、テーリーの町とその周辺の40村が完全に水没、少なく見積もっても7万5,000人以上が立退きを迫られるという重い代償を払わなければならないことになったのである。

テーリーでは、1978年のダム建設起工以来、建設計画の見直しと立退き者への正当な補償を求め、強力なダム反対運動が展開されてきたが、そのテーリー・ダム反対運動を指



写真5 完成間近のテーリー・ダム
(2004年12月12日筆者撮影)

導してきたのが、ガンディー主義者のスダルラール・バフグナ氏(写真6)である。

インドでは、「あらゆる良心的知識人の心のうちにはガンディー主義とマルクス主義のどちらが優位かという葛藤がある」[Guha 2001: 1]と言われるように、独立運動の指導者 M. K. ガンディーの思想と実践に源流をもつ「ガンディー主義」のインパクトが現在も大きい。なかでも「ガンディー主義者」たちは、みずからの生を、みずからの生活のあらゆる側面を、そのガンディー主義の精神に基づいて送っている。そうしたガンディー主義者のなかでもとりわけ有名なのが、このテーリーに住むスダルラール・バフグナ氏であり、私は、彼の思想と実践について研究している。

さて、私がこのテーリーの町を初めて訪れたのは、2003年春(2月)であった。

テーリーの町はすでに、多くの人が立ち退いた後で、ほとんどゴーストタウン化していた。メインストリート沿いには、小さな



写真6 ガンディー主義者、スダルラール・バフグナ氏
(2003年2月27日筆者撮影)

食堂や床屋、服屋、雑貨屋などがそれぞれ2～3軒ずつ残っているが、人影はまばらで、ひっそりとしていた（写真7）。そして、町はいたるところ崩れた建物の残骸だけである。立退きが済んで主人のいなくなった家は、当局のブルドーザーによってつぶされることになっているためだ。「なんにもそこまでしなくても」と思うのだが、頑として立退きを拒否し続ける残留民たちにプレッシャーを与えたいという行政側の焦りが伝わってくる。美しかったテーリーの町がこうして徐々に破壊されていくさまを目のあたりにしながら毎日を暮らしている住民たちの心中は、察するに余りある。

そんななか、忘れられない光景があった。テーリーには野良犬が多いのだが、そのなかに、前足に包帯を巻いた犬がいたのである。瓦礫の破片かなにかでケガをしたのだろうか。私はインドの他の町で、ケガや病気の野良犬が忌み嫌われ追い払われている光景をしばしば目にしてきたが、この水没寸前のテー

リーの町には、ケガを負った野良犬の手当てをしてやるような心温かい住民がいるのだ。殺伐とした雰囲気ななかで私は一瞬、胸が熱くなった。

このテーリーの町が、翌年2004年夏（7月）の雨季の増水時に、一度水没した。私は、その後いったん水が引いた後のテーリーに行ってみた。

まさに廃墟であった。あまりにもひどい。いったん立ち退いたものの、新しい家が整備されていないから戻ってこざるを得なかったという元・町民が数家族、かつての自宅や小学校跡地などで過酷な生活を送っていたが、ほかには誰も住んでいない。また、不思議なもので、猿や牛や豚などは見かけるが、かつてあれほどたくさんいた犬は一匹も見当たらない。あの包帯を巻いてもらった犬は、どこへ「立ち退いた」のだろうか（写真8）。

メインストリートを歩いてゆく。一歩一歩を進めるたびに、白い砂が舞う。水没した際に運ばれてきていた砂が、地面に分厚



写真7 テーリーのメインストリート
(2003年2月28日筆者撮影)



写真8 廃墟となったテーリーのメインストリートを歩く子牛(2004年9月21日筆者撮影)

く堆積しているのだ。テーリー・ダム問題の争点の1つは、土砂堆積率の高いヒマラヤ地域の川に作られるこのダムの寿命がいったい何年くらいかという点であった。行政サイドは100年はもつと主張し、反対運動側はせいぜい30年ほどしかもたないと主張している（もちろんいずれの推定も、それぞれ別の専門家による調査結果に拠ったものであるが）。そんな話を思い出しながら、道端の石に腰掛け、靴に入った砂を取り除いていると、しかし遅かれ早かれここにこうして砂が堆積していつかダムが使い物にならなくなる日が来るのはたしかなわけで、なんだか虚しいような儂いような腹立たしいような思いにとらわれた。そして同時に、こういう文明のあり方はどこか間違っているのではないかと思わざるを得なかった。

テーリーの状況について、デリーなど大都市に住む人たちが次のように語る時、私は、そのあまりにも露骨な、傲慢で冷酷な語りに対し、ときに返す言葉を失ってしまう。「多数の幸福のために少数の犠牲があるのはやむをえないことさ」「テーリーの町が減ぶのは仕方がないと思う。栄えるときもあれば減ぶときもある、この世界はそういうものだから」まるで他人事である。

本来、自己犠牲のみが“犠牲＝供儀(sacrifice)”である、つまりみずからその痛みを共有していなければ犠牲の暴力性は正当化され得ない、という話がある[Das and Nandy 1985: 186]が、スンダルラール・バフグナ氏は、テーリーを他人事にせず、犠牲者にされなんとするテーリーの人々と問

題を共有し、まさに痛み・悲しみ・苦しみをともにしてきた。彼は、水没予定地域の外にあるアーシュラム（共同生活所）での生活を捨てて、テーリーの町に住み込み、先頭に立ち、テーリーの人々とともに闘ってきたのである。2004年夏にテーリーの町が水没したとき、文字どおり最後まで町に残っていたのは、ほかならぬバフグナ氏であった。

田中正造や石牟礼道子をはじめ、もっとも苦しんでいる者と苦しみを分かち合おうとするような（それは現代社会においては「非近代的な奴隷の視座に立つ [Nandy 1983: xi-xii]」ことであるが）、そういう、バフグナ氏に類する人物は日本にも少なからず存在する。しかしインドの場合、こうした人物類型が“ガンディー主義者”の伝統として存在しているところに特徴がある。アーシュラムなどで簡素な生活を送りながら、もっとも苦しんでいる者に自己を同一化させ、非暴力的に、人々の良心に直接訴えかけるという手段を通じて公正な社会を実現していこうと地道な活動をしているガンディー主義者のネットワークが、インドには存在するのだ。

バフグナ氏は毎朝毎晩ガンガーに向かって祈りを捧げるが、どうしようもない壁にぶつかったとき、孤独な思いにとらわれたとき、しばしばこの祈りの最中に、インド各地で活動しているガンディー主義者の同志の顔が自然に思い浮かんでくるという（写真9）。インドには、そういう底力が存在しているのだ。



写真9 ガンガーに向かって朝の祈りを捧げるバ
フグナ氏 (2004年12月22日筆者撮影)

引用文献

- Das, Veena and Nandy, Ashis. 1985. Violence, Victimhood, and the Language of Silence, *Contributions to Indian Sociology* 19(1) (January-June 1985): 177-195.
- Guha, Ramachandra. 2001. *An Anthropologist Among the Marxists and Other Essays*. New Delhi: Permanent Black.
- Nandy, Ashis. 1983. *The Intimate Enemy: Loss and Recovery of Self under Colonialism*. New Delhi: Oxford University Press.